2024年2月17日自然を語る会

『沈黙の春』13章　「狭き窓より」

飯田橋ボランティアセンター＋zoom
参加者　15名
担当　原田さん

『沈黙の春』13章は、これまで見てきた、ほかの生き物への影響から、いよいよ人の体にどのような影響を与えるか、どのように影響を与えるのかが語られている章である。生物学用語も出てくるかなり難しい章であるが、原田さんがとても分かりやすく、簡潔にまとめてくださった。

すべての生き物は細胞で構成されているが、その細胞の中にミトコンドリアという組織がある。この小さい、小さい組織が、生きていくためのエネルギーを作り出す発電所の役割をしている。ミトコンドリアで作られるATPという物質はエネルギーの充電池のようなもので、エネルギーを放出してADPになるが、これにエネルギーを与えるとATPに戻る。このプロセスを阻害されると、細胞の癌化、先天的奇形、生殖能力の低下など起こる。その引き金になるのが、放射線と化学物質だ。

細胞の中には私たちの過去と未来をつなぐ、遺伝子が入っている。細胞分裂の際に前世代の遺伝情報はきちんと染色体に書き込まれ、種の安全が保たれている。ところが放射線や化学薬品はその構造を壊してしまう。ダウン症症候群、慢性白血病など、それに由来する疾患が発見されている。

この章は、レイチェル・カーソンにとっても書き上げるのが難しかった章だろうと話された。ミトコンドリアの役割がわかり始めたころで、まだ一般にはよく知られてはいなかった。彼女自身も、かなり勉強して書いたのではないだろうか。この章あたりで『沈黙の春』をギブアップしたという人もいたが、「この章はとても大切な章だと感じました。難しいけれど、これだけは押さえておけば、みんなが納得できるという、そういう章だと思います」という指摘もあった。

『沈黙の春』全体を通して言えることではあるが、この章では特に「命の大切さ」について話している。そのことに関して、今の社会の現状への憤懣、どのような子育てが必要なのかなど、広範囲にわたって話が弾んだ。

この章の最後に「のぞみさえすれば、この危険な度合いをへらすことができる」と書かれている。「この言葉を胸に、シンプルな生き方を心がけていきたいと思います」という発言に皆が納得して会を終了した。

（小川記）